

東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト5『加賀藩邸出土陶磁器と科学分析』

共同研究 加賀藩邸出土色絵磁器の研究（1）

堀内 秀樹

1. 問題の目的

加賀藩と色絵磁器の関わりは、いわゆる「古九谷」を巡る問題を抜きには語ることはできない。学内調査と「古九谷」を巡るこれまでの調査・研究の経緯やその成果については後述するが、この問題に限らず、色絵磁器についての研究も現在までも様々な視点から蓄積されている。

本研究は、加賀藩邸出土の（色絵）磁器理解のために、考古学、自然科学、文献など多領域にまたがる資料、研究成果を発信するものである。

2. 研究の概要と経過

本研究の第Ⅰ段階として、これまでに行ってきた学内出土磁器の再確認とそれ以降に研究の蓄積や技術の開発などによって、生じた新たな可能性についての共同研究である。今後は、こうした成果を踏まえて藩邸出土の古九谷についても考えていきたい。

（1）プロジェクトメンバー（Ⅰ期）

二宮修治、新免歳靖（東京学芸大学）

水本和美（東京藝術大学）

堀内秀樹（埋蔵文化財調査室）

（2）研究検討会、調査研究プロジェクト（Ⅰ期）

・2019年2月27日 色絵分析の検討（破壊と非破壊分析について）

・2019年8月20日 色絵具分析などの可能性の検討

・2019年12月21日 調査研究プロジェクト（研究の中間報告）の開催

・2020年3月18日 第Ⅱ期研究の課題の所在、分析法などの検討

本報告は、上記2019年12月21日開催の第5回東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト「加賀藩邸出土陶磁器と科学分析」の報告である（第Ⅱ章2節参照）。

附：これまでの加賀藩邸出土色絵磁器と科学分析

（1）「東京大学本郷構内の遺跡」発掘調査開始の経緯

1983年11月、東京大学では100年事業など学内開発に伴って遺跡調査を行う調査組織として臨時遺跡調査室が組織された。事前に行われた山上会館（9月）、御殿下グラウンド（8月）の試掘調査で出土した石垣や金箔瓦などの結果を踏まえて近世加賀藩邸を発掘調査の主要対象として行うためであった。これに先だつ1975年に学内浅野地区現在の工学部9号館裏側にあたる部分の調査が行われ、弥生時代の遺構、遺物が発見され、その翌年に「弥生二丁目遺跡」として国指定の史跡に登録され、発掘から4年後の1979年に『向ヶ岡貝塚』として報告書が刊行されている。こうした経緯が100年事業に伴う開発においても弥生時代が主たる対象としたものではあったが、試掘調査を行う契機となっていた。

1984年から、山上会館、御殿下記念館、法学部4号館、文学部3号館、理学部7号館、医学部附属病院などの発掘調査が本格的に開始され、膨大な量の遺構、遺物が多量に出土し、遺跡が非常に良好な状態で遺存していることが明らかになった。

（2）学内調査と色絵磁器の分析

学内調査と陶磁器分析の関わりは、1980年代後半～1990年代にかけて大きな議論となったいわゆる「古九谷」に関わる研究を抜きにしては語れない。学内調査・整理を進めていく過程で、出土遺物の中に陶磁器研究で生産地の問題があったいわゆる「古九谷」と呼ばれていた色絵磁器が確認された。

周知のように「古九谷」は17世紀後半に加賀大聖寺領内の窯で焼かれたとされる磁器で、初期の色絵磁器として美術的に評価を得ていたものである。本郷構内の加賀藩江戸藩邸である御殿下記念館地点、理学部7号館地点、大聖寺藩邸である附属病院地点から多くの破片が確認されたことから、「古九谷」の生産地論争が再燃することとなった。「古九谷」の生産地問題は、単に学問的なレベルとは別に陶磁器としての評価、現在の産業などが絡むデリケートな問題でもあった。当時、既に胎土、様式、型式、文様等による可視的な部分での議論は百出

しており、客観的な解決方法として自然科学的分析に注目が集まっていた。調査室では、出土した「古九谷」が加賀藩や大聖寺藩邸から出土していること、その一部が天和2(1682)年の火災資料から出土していること、美術的に高い評価を受けている伝世品と近似している点から、東京学芸大学の二宮修治先生、名古屋大学の山崎一雄先生に分析を依頼した。この本郷構内出土陶磁器の分析およびこれと平行して行われた山辺田窯、楠木谷窯、丸尾窯などの有田町教育委員会の発掘調査などの考古学的研究が、17世紀の色絵磁器研究を大きく前進させることになった。

本プロジェクトでは、さまざまな可能性が提示されている自然科学分析について、現在埋蔵文化財調査室と共同で進めている分析・研究を通してその成果と考古学との新たな協業視点などについて考えていきたい。

【参考文献】

- 大成可乃・堀内秀樹 2000 「本郷キャンパスにおける発掘調査の成果－東大構内出土「古九谷」と生産地論争－」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館
- 東京大学キャンパス計画室 2018 『東京大学本郷キャンパス140年の歴史をたどる』東京大学出版会
- 東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器と陶磁器分析年表
- 1987年
- ・東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 「大聖寺藩上屋敷と『古九谷』－東京大学医学部附属病院中央診療棟第I期建設地点の調査より－」『考古学雑誌』第73巻1号 79-97 日本考古学会
 - ・河島達郎 「東大旧大聖寺藩上屋敷出土の古九谷陶片の分析結果について」『陶説』412 85-87
- 1988年
- ・長佐古真也・羽生淳子 「東京大学本郷構内遺跡理学部7号館地点出土「古九谷」の生産地推定」『昭和六三年度日本文化財科学会大会発表要旨』24-25
- 1989年
- ・羽生淳子・長佐古真也・大橋康二 「第六章第一節 理学部七号館地点出土古九谷様式磁器片の化学分析による生産地推定」『理学部七号館地点』425-455 東京大学遺跡調査室
- 1990年
- ・山崎一雄・大橋康二・望月明彦・杉崎隆一・内田哲男・小山睦夫・高田實弥・藁科哲男・東村武信 「五章第九節 科学的分析」『医学部附属病院地点』924-944 東京大学遺跡調査室
- 1991年
- ・二宮修治・羽生淳子・大橋康二・藁科実・網干守・大沢真澄・長佐古真也 「放射化分析による消費地遺跡出土磁器片の生産地推定－江戸時代前期の資料を用いて－」『貿易陶磁研究』11 201-234
 - ・河島達郎・小木一良 『古九谷の実証的見方』創樹社美術出版
- 1993年
- ・山崎一雄 「江戸前期の色絵磁器の化学分析－東京大学医学部附属病院地点と山辺田二号窯址付近出土の破片－」『東洋陶磁』20・21 79-84 東洋陶磁学会
- 1994年
- ・山崎一雄・成瀬晃司・堀内秀樹・大橋康二・望月明彦・杉崎隆一・内田哲男・小山睦夫・高田實弥・藁科哲男・東村武信 「東京大学医学部附属病院地点出土の江戸時代陶磁器片の材質及び産地」『考古学雑誌』、第79巻4号 87-123 日本考古学会
 - ・二宮修治・網干守・堀内秀樹・山崎一雄 「東京大学本郷構内の遺跡 病院地点出土の一色絵破片の化学分析と産地判定」、『考古学と自然科学』27 79-85
- 1999年
- ・降幡順子 「蛍光X線分析法による東大構内出土資料の分析」『課題番号08044016 国際学術研究(共同研究)陶磁器文化の交流に関する科学研究』IV 161- IV 177 奈良国立文化財研究所 沢田正昭
 - ・小泉好延・小林紘一・堀内秀樹・成瀬晃司・原祐一・大成可乃・中野忠一郎 「東大本郷構内(旧加賀藩邸)の磁器上絵分析」『第1回 考古科学シンポジウム』101-103
- 2005年
- ・降幡順子・村上隆・堀内秀樹 「外来診療棟地点SK171出土陶磁器の自然科学分析」『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 2009年
- ・M. Hidaka, H. Horiuchi, K. Ohashi, R. P. Wijesundera, L. S. R. Kumara, Jae-Young Choi, Yong Jun Park, Structural properties of the red-color overglazes on the Kakiemon-style porcelains produced in the later 17th century by means of X-ray diffraction (I), *Cerâmica* 55, (2009) 120-127.